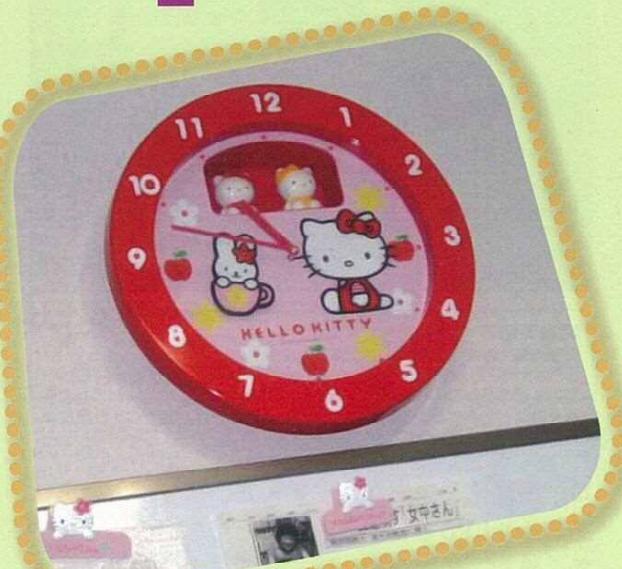


こらぼり

目	「結婚観」いま・むかし ～今どきの若者はどう思っている？～…2～4
次	「結婚しないの」ってなぜ聞くの？…5 「女性のためのセルフディフェンス講座」…6 「こらぼらいぶらり～へようこそ」…7 インフォメーション…8



「キティの魅力は、口がついてなく無表情で、見る側の感情を投影させやすいところでしょうか。ストーリー性も薄いから、何に扮しても許される変幻自在さがいいのかもしれませんね。」

しみずみ ちこ
関西国際大学人間学部教授 清水美知子さん－研究室にて－

第7号
2007.春



「結婚観」いま・むかし

結婚・子育てをどうとらえるか…今どきの若者は、ずいぶん考え方が多様化しているように思われますが、実際はどうなのでしょうか？ 関西国際大学（三木市志染町青山）教授で、高齢化社会や家族関係論などの授業が非常におもしろいと評判の清水美知子さんに、大学内にある先生の研究室で、学生達の結婚に対する意識について、また、少子化問題や子育て支援について、熱く語っていただきました。



清水美知子（しみずみちこ）さん

関西国際大学人間学部教授。兵庫県尼崎市生まれ。専門は、〈女性〉〈家庭〉〈社会〉の3つをキーワードとする領域の研究。おもな著書として、「〈女中〉イメージの家庭文化史」など。県の社会教育委員などを務める。三木市男女共同参画プラン策定委員。ファン歴32年の“筋金入りキティラー”でもある。

プロフィール

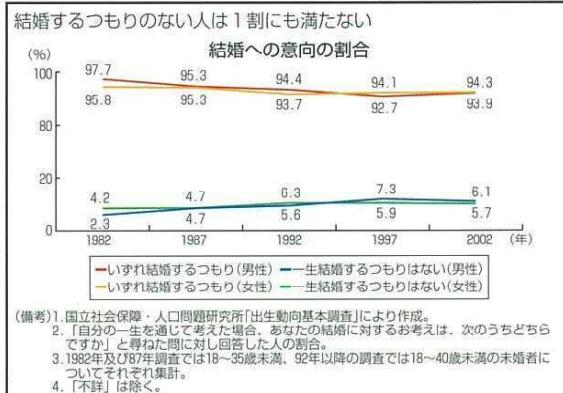
Q. 晩婚化、未婚化がすすんでいますが、若者は結婚したいのでしょうか。したくないのでしょうか。また、結婚を取り巻く状況について教えてください。

A. 数十年前なら、「結婚したいか否か」という質問自体ありえなかったと思います。「結婚して当然」の世の中でしたから。今日では、非婚に対する見方は寛容になりました。とはいものの、独身志向が強まったわけではありません。未婚の若者に結婚への意向を聞くと、大半が「いずれ結婚するつもり」と答えており、結婚願望は強いのではないでしょうか。

かつて日本には、“女性はクリスマス・ケーキ”という結婚適齢期説が存在し、25歳を過ぎて結婚しないでいると、強い圧力がかかったものでした。それが今では、30歳を越えても遅いとは言われなくなりました。“女性はクリスマス・ケーキ”どころか“年越しそば”でも大丈夫。あせって結婚などせず、「適当な相手」にめぐり会うのを待とうという人が増えたのです。結婚はしたい。でも、適当な相手はまだ見つからない。こういう意識が「いずれ結婚するつもり」という回答となって現れているようです。

恋愛結婚が主流になったことも、結婚を難しくしています。恋に落ち、愛情が高まって結婚したいとは、若者がよくいうセリフですが、恋愛が情熱（勢い？）でするのなら、結婚は理性（打算？）でするもの。恋に落ちたものの、本当の愛情かと疑いを抱く。もっといい人（=適当な相手）がいるのではと期待してしまう。これでは、なかなか結婚に踏み切ることはできません。

■平成17年版 国民生活白書（結婚の意向への割合）



Q. 経験的に考えても、マスコミでの情報からでも、「できちゃった婚」が増加しているように受けますが、何故でしょうか。

A. 「できちゃった婚」増加の背景には、性をめぐる意識・行動が、この数十年で劇的に変わったことがあります。かつては、結婚前の女性が性交渉をもつことは、たとえ相手が恋人であっても、大っぴらには認められませんでした。それが今では、大半の若者が「愛情があるなら結婚前にセックスしてもいい」と考えていますし、親世代も、「愛し合っているのならそれも有りかな」と婚前交渉を容認するようになってきています。現実に、大学生はもちろん、高校生・中学生で性交渉の経験を持つ者も少なくありません。学校で「望まない妊娠と性感染症には気をつけて」というようなことを言わねばならない時代なのです。

～今どきの若者はどう思っている?～



一方で、日本は老若男女を問わず、法律婚の基盤のうえで子育てをしようとする意識が非常に強い国です。これは、他の先進諸国に比べ、日本の婚外子比率がきわめて低いということからも明らかでしょう。

結果として、妊娠がわかれば子どもが産まれるまでに婚姻届を出すということが、一般的に行われるようになりました。女性の平均初産年齢は29歳ですが、29歳の妊婦さんがいちばん多いと思われる大間違い。「きわめて若い妊婦」と「かなり年のいった妊婦」の二極分化しているのが現状です。そして20代前半までの出産の主流を、「できちゃった婚」が占めているのです。



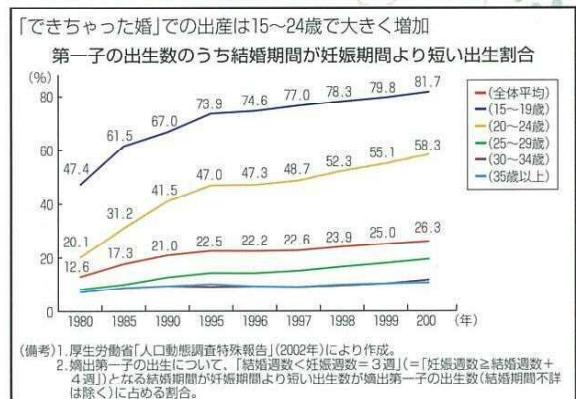
Q. 異婚率や再婚率も上昇しているように思いますが、その背景にあるものは何でしょうか。

A. やはり女性の離婚観の変化が大きいですね。かつては、経済的に苦況に立つから、子どもを片親にしたくないからという理由で、離婚に踏み切れない女性が少なくありませんでした。今でもその状況はあるわけですが、離婚を、人生をリセットできる機会ととらえ、マイナスばかり数えずプラスの面も見つめて、新規まき直しをはかろうという人が増えました。人生80年、90年の時代。たとえ40歳で離婚しても、まだ40~50年もあるわけですね。

再婚についても、子どもがいるからと躊躇する

人は減りつつあるように思います。学生たちに接していく中で、子連れ再婚の家庭がちょこちょこ見られるようになりました。血縁を前提としない親子関係が軌道に乗るには苦労も多いのですが、「これも一つ」と前向きにとらえている家族は、それなりにうまくいっているようです。

■平成17年版 国民生活白書（できちゃった婚の割合）



Q. 少子化が大変進んでいますが、何故でしょうか。また、有効な対策はありますか。

A. フランスやオランダ、スウェーデンなどでは、婚姻によらない関係も認められ、そうした人びとの子育てにも支援の手が差し伸べられていることから、出生率が上昇しつつあるそうです。しかし、同じような制度が日本で認められても、出生率アップにつながるとは言えません。学生たちの①PACS（フランス）や②SAMBO（スウェーデン）などへの反応は、「よい制度だとは思うが日本では根づくのは難しい」「自分は法律婚をして子どもを持ちたい」といった回答が多数を占めました。

私が教室で聞いた生の声からいえば、今どきの女子大生は専業主婦志向が強く、当然のことながら、結婚相手の条件として経済力や安定した職業を求めます。「子どもを保育園に預けてまで両立しなければならない仕事につけるとは思えない」

①PACS（パックス）：1999年に成立したフランスの「連帯市民協約（PACS）法」のこと。契約によって、結婚していないカップルにも配偶関係と同様の社会的権利を認めている。パートナーは同性・異性を問わない。フランスでは80年代より、婚姻関係外で子どもを生む行動が一般化しているが、そうした状況を後押しするものといえる。

②SAMBO（サンボ）：1987年に成立したスウェーデンの「同棲（サンボ）法」のこと。非法律婚カップルが共同で継続的に生活を送り、共同で財産を管理し家計を維持していくルールを定めている。この法律が施行されて以降、スウェーデンでは、法律婚カップルの9割がサンボを経て結婚しているという。

「たとえ両立できたとしても、自分の時間も持てないような生活は嫌だ」というのがおもな理由です。

現在の少子化対策は、女性の育児休業の延長や保育所設置の条件緩和など、既婚者向けのものが中心です。もちろん、育児休業や保育所の充実は必要ですが、結婚（婚姻）関係のなかで子どもを産むという日本人の特徴を考えるならば、若者が結婚したくなるような社会環境・条件を整えることが鍵となるでしょう。

就職氷河期の時代、高校や大学を卒業しても正社員として就職できず、派遣社員やアルバイトなど非正規雇用の若者が大量に現れました。非正規で働く男性はなかなか結婚できず、結婚できないから就労意欲が低下して離職が進みます。一方、正社員として働く男性は、残業をいとわず働くことを強いられ、結婚しても家庭を十分顧みる余裕などありません。これでは女性たちが結婚をためらい、先延ばしするのも無理はありません。

まずは、若者の雇用を確保するとともに、雇用者、とくに男性の働き方を見直して、父親も子育てに関われる環境を整えることが必要です。女性には仕事に必要なスキルを身につけるなど、共働きを可能にする条件を整えることが課題となります。これらは即効性はないかもしれません、長い目でみて有効な方法であると思います。

Q. 三木市の子育て支援にもかかわっていらっしゃいますが、子育てについてお考えをお聞かせください。

A. 私自身は、出産や育児の経験がないんですね。そのせいかもしれませんが、家で子どもを育てているお母さんを見ると、「子どもを持たない選択肢もある今、ほんとうにエライよなあ」と思わずにはいられません。子どもは社会の宝。外で働くことだけが社会参加ではない。子どもに終日関わっているのですから、"子育ては究極の社会参加"と言えるのではないでしょうか。お母さんたちは「社会から取り残されている」なんて落ち込む必要はありません。24時間子どもを通して社会と関わっているのですから、子育てにもたまには息抜きが必要なのです。

ともすれば、「今どきの親は」と批判されることが多い世の中ですが、子育ての知識やスキルも、子どもに対する態度も、親として育っていくなかで身につくもの。

祖父母世代もかつては新米の親だったというこ



とを、思い出してもらいたいですね。

子どもを育てる家庭を温かく見守り、必要なときには支援の手を差し伸べる姿勢が、今、地域に求められています。そのためには、支える側も今どきの子育てについて学び、支援のスキルと態度を身につけることが必要です。子どもを持つ人も持たない人も、子育て経験のある人もない人も、女性も男性も、できる時に、できる形で関わっていくことが大切です。子育て支援に関わる人たちの支援など、私もできることから始めようと考えています。

＜インタビューを終えて＞

●インタビューを受ける立場でありながら、先生は一方的にお話をされるのではなく、私たち編集委員の話も引き出し、受け止めてくださいました。授業を受けているようで、充実感があり、あつという間の2時間でした。その中で世代による結婚観の違いを知り、また自分を客観的に見つめなおす事ができました。大好きなキティちゃんに囲まれた先生は、介護・離婚を乗り越えてこられたことを感じさせず、そのことで今の私があると、にこやかに話されました。今度は「ジェンダー」や「孫世代の子育て」など他の研究テーマのお話を聞きたいです。

●人間は、自分一人で考え方行動していると思いがちですが、そのときの社会の意識や、制度などに大きく左右されているものです。自分の結婚を振り返ってみて、同時代の人たちと結婚を決めた状況や、結婚観など類似点が多いことに驚きました。まさに、人は個でありながら社会の一員でもあることを痛感させられました。その中であっても、自分らしい判断や考えをどれだけできるかが一人ひとり問われているような気がしました。

●素敵なお母さん、優しいスタッフ、広いキャンパス・・・三木にこんな良い大学があるなんて知りませんでした(笑)。



「結婚しないの?」ってなぜ聞くの?

「結婚しないの」と聞かれると、ちょっと困る。理由が見つからないからだ。

仕方がないので、「相手がいないから」とか「考えてないので」と答える。

でもこれって、「結婚するのは当たり前、するべきものだ」という考えがあるから出てくる発言じゃないかな。私(25歳・独身)の想いを聞いてください…。



●「結婚したくない」とは言ってないが…。

周りの10代~30代の友人を見てみると、「いつかは結婚したい」といいながらも何もしない人が多い。「結婚したくない」とは思っていないが、「絶対結婚したい!」「早く結婚しなきゃ!」という強い意志もない。なんとなく気がつけば、いつのまにか結婚できたらいい…と他力本願なところがあったりする。

●「結婚適齢期(といわれている)」人が皆結婚したがっているわけでもない。

結婚よりも、仕事や夢など優先したいことがあるとか、結婚する気はない・考えたこともないと言う人もいる。

今の時代、お見合いを勧められたり結婚を強要されることも少なくなってきたのでは…。家庭に経済的余裕が出来てきたことや社会の風潮からかもしれないが、結婚を急がされることが少なくなってきたような気がする。



●あこがれと不安

結婚すれば、心を許し合える相手と暮らせ、精神的な安らぎが得られ、愛するとの間に子どもを持つんだろうし、幸せな家庭を築ける。早く結婚したいと思っている人も、もちろんたくさんいる。

しかし、結婚したいと思っても、自分が結婚に向いているのか不安が出てくる。結婚することは、育ってきた環境が違う他人と人生を共にするということだ。今まで当たり前だと思っていたことが、相手にとっては当たり前じゃないこともあるだろう。「喜びは倍、苦しみは半分に」なんていうけれど、そんないいことづくしでもないので…喜びは倍になるかもしれないが、自由は間違いなく半分以下になる。人によっては職を失い、身近な人間関係を失い、お金を失う。

経済面、家事、育児、考え出すと不安要素はたくさんある。

●結婚すると決めた後

「一生ついて行きます。幸せにしてね」なんていう考えは時代錯誤だと思う。「幸せにしてもらう」じゃなく「共に幸せになる」ぐらいの気持ちは誰しも持っているのがいいなあ。

「家族を守るのは、俺しかいない」と、負担を背負っている男性がいるけどそれも変だ。家族を守るのは家族全員だって思う。

結婚は「人生の墓場」でもないし「バラ色の生活」ってわけでもないと思う。でも、多くの人が結婚するということは、バラ色じゃなくても何かいいことがあるに違いない。そうでなければ、一人一人でも充分生きていけそうな自立した人達があえて結婚している理由が分からない。



●気になること

事実婚・夫婦別姓・子どもがいない夫婦・非婚といったことに「理由はなにか?」と問われるのはなぜだろう。それは、これらの人達がまだ少数派であり、結婚・夫婦同姓・子どものいる夫婦が、普通で当たり前だと思われているからだろう。例えば、今後、結婚しない人がする人を上回るようになってきたら「なぜ結婚するの?」と問われるようになるかもしれない。

もし、私が結婚したくなかったら、結婚しなくてもいいじゃないの、私は私!と、一人で生きていけるだろうか。世間をまったく気にせず過ごせるだろうか。今の社会のままでは難しそうだ。

●自分らしくありたい!

自分の人生について、これからどう生きて行くのか、自分はどう年を重ねていくのか、結婚ってそういうことを考えるいい機会かもしれない。でも、慣習や世間の常識にとらわれず、しかし「自分らしくあること」って難しいなあって思う。

「自分の身は自分で守ろう！女性のためのセルフディフェンス」

2006年11月11日、そろそろ忘年会シーズンに突入し、女性の夜道の一人歩きも多くなるであろう頃、護身術の講座に参加しました。防具を身につけた男性インストラクター相手に、全力で反撃方法を学びました。おかげで3時間の講座を終えた後、すっかり強くなった気分でした。

講座では、まず暴漢や痴漢に遭遇しないコツを教えていただき、次に遭遇してしまった時の反撃方法（逃げるための手段）を教えていただきました。参加出来なかった方のために、ここで少しご紹介します。

襲われないコツってあるの？

◆常にアンテナを張っておこう！

歩く時は、真正面だけでなく、左右180度の範囲まで見て歩さましょう。自分の五感を使って、周囲に注意を払い（携帯電話でメールしながら歩くのはよくありません）、自分の天然のアラームシステム（第六感のことです）を使って常に行動しましょう。「この道、気持ち悪いな…」と思ったなら、気のせいだと打ち消さず、その道は避けましょう。また、乗ろうとしたエレベータに一人誰かが乗っていたなら、「次のを待っていますから」と言う勇気を持ちたいものです。

◆強い声で、はっきりとした態度で!!

不審者は、「駅どこですか？」、「今何時ですか？」と最初、声をかけてくることが多いようです。不審者に声をかけられたら、はっきりとした態度で追い返しましょう。「知らない！」、「分からない！」、「そこのコンビニで聞いて！」、「時計は持ってません！」と言いましょう。どうしても逃げ腰になりがちですが、不審者をしっかり見て言うのが良いようです。背中を向けてはいけません。



▲目突きをしているところ(右は女性インストラクター)
受講者のそばで、見守り励まし適格な指示をしてくれました。

もしも襲われてしまった時はどうするの？

◆最後まで逃げることをあきらめないで！

強い口調、大きな声で追い返そうとしたのにもかかわらず、不審者が近づいて来たなら、とにかく大声で、「来るな！」と叫びましょう。周りの人に、自分達が遊んでいるのではないことを知らせるのです。もし、不審者に腕をつかまれたら、つかまれた驚きで、動けなくなるかも知れませんが、冷静に自分に何ができるか考えましょう。腕がダメでも足があいているなら、不審者の足を踏んづけることができるはずです。

◆今、この時だけに集中して！

今、何が起きているか？ 相手はどこにいるか？ 私に何ができるか？ 冷静に状況判断し、反撃し、逃げるチャンスを待ちましょう。「この道を選んだのが悪かった…」過ぎてしまったことは忘れて、逃げることだけ全力で取り組みましょう。



▲目突きの後、股蹴りをするところ

◆どのように反撃するのか？

まずは、手っ取り早い武器として「声」があります。そして、「目突き」。両手をくちばしの形にして、しつこい不審者の目を突くのです。そして、「股蹴り」。不審者の股間は常にターゲットです。

受講者からは、「一人ずつ実践的に体験したことで、やったら出来るという自信がつきました」などの感想があり、大変好評でした。

インストラクター：インパクト関西

米国で考案されたこの護身法は、全米に広まり、高く評価されています。子ども用の講座もあり。
ホームページ <http://www.impactkansai.com>

三木市出身でいろいろな方面で活躍中の方の本をご紹介します。

『くまのこうちょうせんせい』



このひとみ・作 いもとようこ・絵
角川書店 2001年

私の子どもは、食物アレルギーがありました。卵、牛乳、小麦が食べられませんでした。

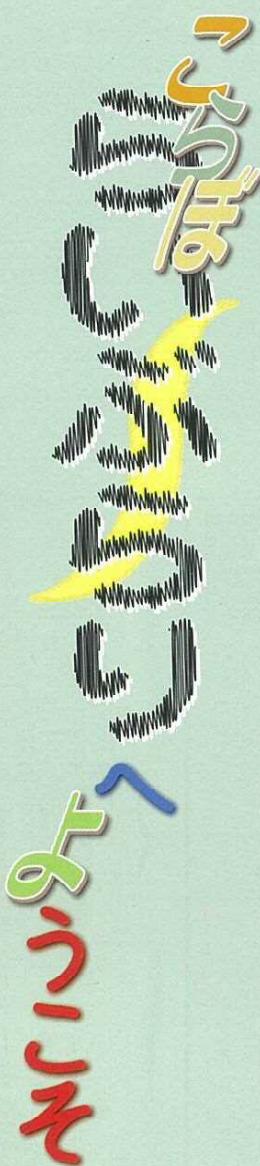
食べたくても食べられない。本人がどんなに努力しても、できないことがあります。

絵本の中のひつじくんも大きな声が出来ません、そんなひつじくんに校長先生が「勇気を出して」と応援します。でも、その校長先生が入院してしまいます。校長先生は、大きな声が出せなくなりました。出そうと思っても出せないときがある、はじめて気がついた校長先生…。

見ているだけで、ほのぼのする絵を描いていらっしゃいます。

いもとようこさんその他の本：

「どうよう(ぞうさん)」
「どうよう(チューリップ)」
「どうよう(げんこつやまのたぬきさん)」
講談社 1994年



『性と生 素敵にコミュニケーション』



赤松彰子 著
かもがわ出版
1993年

さりげなく置いてあったらしい本だと思いました。

パートナーにも、娘にも、息子にも読んでもらいたい本です。薄くて、字も大きいので、手にするとつい読んでしまいますし、題名も興味を引きます。
一家の希望の星の娘の妊娠に母は…。
愛娘の結婚に賭けてきた夢がメチャメチャになった父は…。

元気な時には、好き放題してきた夫が寝たきりになった時、妻は…。

大事な命、一つしかない命、生まれてこなくても命は命！
保健師や助産師の資格を持たれ、ご自宅を開放され、おしゃべりルーム「里の家」を主宰されている赤松彰子さんの本です。

赤松彰子さんその他の本：
「家族で語る性教育」
かもがわ出版 2005年
「更年期からの脱出」
かもがわ出版 1997年

『恋をするには遅すぎない』

玉岡かおる 著 角川書店 2001年



恋に死にはしたくない。
たとえ、その恋が成就することなく終わっても。
その恋をせずにいた頃の自分と、恋を終えた今の自分とでは、
大きなステップを上がってしまったといえるような恋でありたい。
運でもはずみでもなく、どこかお互いの中にがっぷり対等に組んで惹かれ合う。
私が一番感銘した文章です。こんな恋ができる人生でありたい。
今からでも遅くないかも？？

玉岡かおるさんその他の本：「蒼のなかに」 新潮社 2004年

紹介した本は、男女共同参画センターにあります。
貸出していますのでご利用ください。

インフォメーション

三木市男女共同参画センターのご案内

◆男女共同参画センターでは、「女性のための相談室」を開設しています。女性が直面する様々な問題や、誰にも話せない悩みや不安をひとりで抱え込んでいませんか？ひとりで悩んでいないで、相談してみませんか。解決に向けてお手伝いをさせていただきます。女性相談員が対応します。相談は無料で、秘密は固く守ります。安心して、ご相談ください。

- ★電話相談 TEL.0794-89-2354
木曜日／13:00～16:00 土曜日／10:00～12:00
★面接相談（要予約）
木曜日／10:00～12:00 土曜日／13:00～16:00
(予約電話)月・水～金／TEL.0794-89-2331
火／TEL.0794-82-2000 内線 2350

◆DVに悩んでいる女性のための語り合い 毎月第3木曜日
同じような経験を語り合い、気持ちを分かち合い、情報交換しましょう

◆女性にまつわるいろいろなテーマで語り合う会（おしゃれカフェ） 10:00～12:00 每月第1土曜日（原則）
少人数で何でも気軽に話し合いましょう

「離婚時の厚生年金の分割制度」 が4月から施行されます。

近年、中高齢者等の離婚件数が増加していますが、現役時代の男女の雇用格差・給与格差などを背景に、離婚後の夫婦双方の年金受給額には大きな開きがあるという問題があります。このような事情を考慮して、2007（平成19）年4月以降に離婚が成立した場合、当事者間の合意か裁判所の決定があれば、婚姻期間中の厚生年金を分割できます。分割の上限は5割までです。

また、2008（平成20）年4月以降の第3号被保険者期間の厚生年金については、離婚をした場合、当事者一方からの請求により自動的に2分の1に分割されます。

（平成20年4月1日前の第3号被保険者期間については、当事者間の合意か裁判所の決定が必要です。）

※請求期限は離婚が成立した日から2年を経過するまでです。また、自分自身が年金受給資格を有していないと、分割した年金を受給することができません。

詳しくは、社会保険庁のホームページをご覧いただくか、
<http://www.sia.go.jp/topics/2006/n1003.html>
社会保険事務所にお問い合わせください。
(明石社会保険事務所 078-912-4916)

お知らせ

上映会「ベアテの贈りもの」

～女性の人権を憲法に書いた人～

日本の敗戦後、新しい憲法草案作成の時、男女平等を明記したベアテ・シロタ・ゴードンさん。日本の女性たちの情熱と運動を世界史的視野でとらえた戦後女性史を映像でおくります。

日時 平成19年3月29日(木)

①午後2時

②午後6時30分の2回上映

会場 三木市文化会館小ホール

TEL.0794-83-3300

料金 前売 大人 800円(当日1,000円)

大学生以下 500円(当日700円)

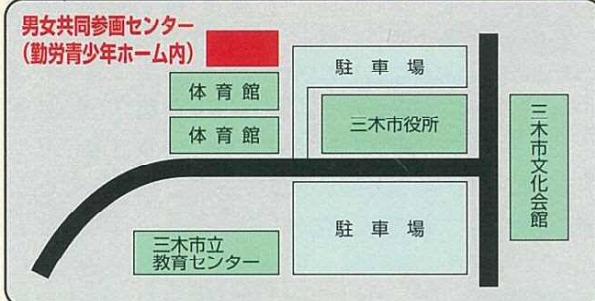
主催 「ベアテの贈りもの」上映実行委員会

後援 三木市・三木市教育委員会

※お問い合わせは、

三木市男女共同参画センターまで。

男女共同参画センターでは、情報誌表紙のイラストを募集しています。
住所・氏名・年齢・電話番号を明記の上、ご応募ください。
【送付先】〒673-0432 三木市上の丸町8-30
男女共同参画センター「こらぼーよ」
※原稿の返却はしませんのでご了承ください。
・本誌に対するみなさんのご意見、ご感想をお聞かせください。
・情報誌編集委員を募集しています。一緒に情報誌をつくってみませんか。



編集後記

- それぞれの「結婚」にそれぞれの「ドラマ」あり。
「結婚」って何でしょう？ (せと)
- 寒くない冬は過ごしやすい反面、何だか心配になります。
春夏秋冬がなくなってしまったたらどうしよう。 (福田)
- 今年は年女…心も体も生活も見直して、
心機一転頑張るぞ！ (〇ノ)
- 暖冬で人間は過ごしやすかったけど、世界の氷がとけて
地球があぶない!! (K)
- 自分の勘を大切にする事から護身術は始まる。「女の勘
は当たる」そうですよ☆ (ひー)

企画・編集
発 行

情報誌編集委員会

三木市企画部人権推進課（男女共同参画センター「こらぼーよ」）

〒673-0432 三木市上の丸町8番30号

TEL/FAX. 0794-89-2331 E-mail:jinken@city.miki.lg.jp